霊場巡りに参加して

西部　畑中　実

毎年実施されている朝日寺の四国霊場巡りが、今年も十月十二日から二泊三日で行なわれた。今回の巡拝予定は二十一ヶ寺で主として讃岐路一帯で、私ははじめて之に参加させて頂いた。

十二日早朝一行五十三名（内四名納経帖、納経軸署名のため先発）は爽やかな好天に恵まれ、六時尻海出発、内海の多島美と完成間近い瀬戸大橋の景観を眺めながら四国の玄関口高松港へ着く、大橋完成後この玄関口としての機能を何処まで維持し得るのか、之はその行政の如何による処であるが、現在は間近に迫ったその変貌も知らぬげに四国第一の都市として活況を呈している。高松港上陸後、一行は本日第一の予定地満濃池に着く。弘法大師が建設されたと言う讃岐一帯の水源池である。この池も今年は少雨の故か岸壁は肌もあらわに水位は低く、水不足を物語っていた。傍の寺院へ先ずお参りして、若松住職先達で般若心経を全員で誦和、各人それぞれ心を込めて祈念する。雑念を払い、ただひたすらに伏し拝む。その姿は実に尊いものであり、身も心も清められていく心地がする。一行はこれより沿道に黄金色に実った稲穂の波を窓に見ながら、十時半次の予定地琴平（昼食予定地）に到着、昼食には早いので予定にはないが琴平宮へ参拝することとなり、私は参拝希望者の方々と同行する。七百八十五段の石段を登り、足に自信のなかった私もこれで大いに自信を持つ。

昼食後は六十七番大興寺へ参拝後、愛媛県東端の六十五番三角寺と徳島県西北端に位置する六十六番雲辺寺にお参りする。両寺院とも遠路のため、タクシーに分乗して参拝、運転手の説明によれば三角寺は標高六百メートル雲辺寺は約一千メートルとか、野球の名門校池田高校が近くにある。これで今日の巡拝予定三ケ寺を終了、暮色迫る頃宿泊予定の観音寺ホテルに一泊。

明けて十三日一行は七時半ホテルを出発、昨日とは逆の東進コースをとる。海岸線を走る度に左前方に壮大な瀬戸大橋を見ながら、六十八番神恵院につく、同所に建立された六十九番観音寺にともども参拝後、ここで全員記念写真をとる。次の札所七十番本山寺を経て今回巡拝中一番の難所である七十一番弥谷寺へ。ここでは足に自信のない人達がタクシーに分乗して参拝されたが、私は徒歩組の方と同行する。昨年の丁度この頃私は腰痛のため入院、車椅子で行動していた事を思い出し、今年はこの様に元気でお参りさせて頂ける有難さを身にしみて感じた。特に参拝の途すがら一団となって和やかに対話を重ねながら、コミュニケーションの輪を広げる事が出来ると言う事は実に素晴らしい事である。

弥谷寺参拝後七十二番曼荼羅寺、七十三番出釈迦寺、七十四番甲山寺を経て、昼食は七十五番善通寺で頂く。

善通寺は人も知る大師出生の地であり、高野山、京都東寺と共に大師の三大霊跡といわれ、その御遺徳を慕ってお参りする人は絶え間もない。

午後は七十六番金倉寺、七十七番道隆寺、七十八番郷照寺を経て七十九番高照院（天皇寺とも言う）へお参りする。この寺院はその昔第七十五代崇徳天皇が保元の乱に敗れこの地へ配流となり、四十六才で薨去、京都へその旨奏聞する間の三十七日間玉棺をこの寺へ安置、その菩提を弔ったと言う由諸ある寺である。

続いて八十番国分寺へ参拝、本日の予定十三ケ寺を終了して、宿泊予定の折鶴旅館へ一泊、三日目十四日は八時出発、八十三番一宮寺から八十一番白峯寺（崇徳天皇の御陵のある所）八十二番根香寺を巡拝後、栗林公園内で昼食、八十五番五剣山八栗寺と源平の古戦場屋島にある屋島寺（中国揚州の名僧鑑真和上の開基されたと言われる）へ参拝、今回の巡拝を予定通り終了帰途につく。秋の夕日はつるべ落しと言うがきれいな夕景色を眺めながら内海を渡り、家へついた時は十九時過ぎであった。

さてこの霊場巡りに足の自信のない私は尚一抹の不安を抱きながら参加させていただきましたが、穏やかな気候に恵まれ又和やかなムードで終始した誠に快適で楽しい旅であったと思います。

戦後の目覚しい経済発展は物的面のみが重視され、精神面の軽視される風潮の中で大師の御遺徳を伝えるためにも、又心の修養の場としてこの様な企画は是非継続して頂きたいと思います。科学万能の恵まれた環境にある現在こそ我々は御先祖に感謝する心を忘れてはならないと思います。

巡拝してみて何処のお寺でも、その維持管理には四苦八苦している様が窺われますが、我が菩提寺朝日寺では先には薬医門の修復に続いて鐘楼堂の修復、更に本年度には土塀の修復が行なわれるとか、総代の皆様方の一方ならぬお骨折と檀家の皆様方の御協力により

お寺も立派に整備されることと思います。有難い事と心より感謝して居ります。私達は今後共尚一層お寺の維持に努力を怠ってはならないと思います。終りにこの三日間本当に有難う御座居ました。紙上をかりて厚く御礼申し上げます。

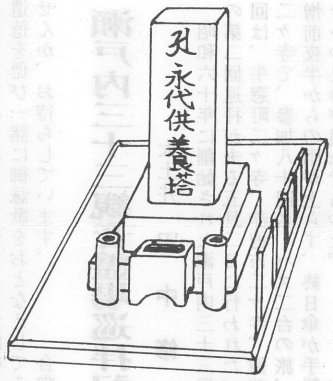
合掌

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

永代供養塔建立

近年、色々な事からお墓の事を相談される人が増えてきました。転勤等で遠く地元を離れている為、先祖のお墓を守りする事が出来ない、あるいは後を祭ってくれる人がいない等々……。

こういう方々の為に朝日寺では墓苑の一画に墓を建立することを計画しております。正面には永代供養塔とほりこみ、地下に納骨室をつくり、横にお一人／＼の戒名等を記したものを建てるよう考えています。またお盆、お彼岸にはお花、お経をあげて供養もいたします。今のところ費用は納骨料二十五万円、戒名等を記すための石、五万円、計三十万円を予定しております。春のお彼岸までには建立の手はずですので、詳しい事をお知りになりたい方は寺までご連絡下さい。



完成予想図

十三仏巡り

七、薬師如来

お薬師さんは観音さんとならんで人気の高い仏さんです。朝日寺の本尊さんもこのお薬師さんです。これは、病気になった時、あるいは精神的な不安をもったり、自信をなくした時、この薬のつぼを開いて薬を与えてくれます。

そして病気をなおし、自信や勇気を与えてくれるわけです。また左手は与願の印といって手のひらを我々の方へむけておられます。

これは、いつも自分が見守っているから安心しなさいよ、という事を表わしています。

現代人は色々なストレスで心の不安を持つ人が多いようです。このお薬師さんをこそ心の拠り所としてやすらぎを得ていただきたいと思います。

朝日寺では密教婦人会の方々によって境内に、ボケなし薬師像が建立されました。長寿社会をむかえてボケないで元気に長生きをしてというのは誰もの願いです。

どうぞお参りいただければと思います。

遍路行

一信者

八月十三日、何のためらいもなく午前五時三十分発、高徳線造田駅から徳島行きに乗った。勿論、すげ笠、杖は買って貰っていたが、白装束、手甲、脚絆、遍路袋は妻に縫って貰ったもの。それも二・三日前家内に私はどうしても吉野川を越えた阿波の札所にお参りしたいから白装束を縫ってくれないのかと伝えた処、家内も何やら充分わからずも直ぐ調達、縫ってくれた。そうして自らの家の前に立ち、南無大師遍照金剛、般若心経を唱え、出発したのだった。

生れて初めての白装束、汽車の中でも何が何だか分からない。下り一番列車なので、列車中の客はまばら、讃岐相生駅から一人中年すぎの女性が乗りました。トンネルを越え、阿波大宮で駅に停車、その女性は下車直前、私の傍に来て十円玉を静かに出した。私はためらった。はじめて笠に杖、白装束の遍路だとその瞬間両手を合わせ頭を垂れて十円玉を頂き、納経札入に収めた。汽車は発車、板東駅に停車、すると朝一番列車とあって大きな風呂敷を肩に、両手に荷物を下げた中年の婦人。商いに行くのだろう。十数人乗車する姿を見て、あ、、阿波の女の人はよく働く、成程と感心しながら人皆生きる為、子供を、家を守る為、一生懸命働く姿を尊い気持で観つつ、さこ駅に到着、阿波池田行に乗り替え、一路十一番、藤井寺に向った。国鉄鴨島駅で下車行きずりの人に道をきき藤井寺に向った。途中、一キロ程歩いた時、反対方向にこちらに向って来る肩に荷物を背負った、年の頃七十を数年越えた、あごにみすぼらしく長くたれた、緩やかに歩く遍路と対向、其の時思わず駆け寄り、先に頂いた十円玉を私の今の先輩と思い、その老人に差し出すや老遍路眼光するどく私を見つめ、札狭みより不自由な手つきで金色の納札経を私に差し出し、これは魔よけだから肌身はなさず持って行け、と言われ、私の差し出す十円玉を喜んで不自由な手に納めた。そして一礼して踵を返して又道路の右側をこつこつと十一番へ向った。そして、その時は納経帖なんて考えてもなし、阿波の寺の番も寺名も分からない、時計も水筒も何もない、三十センチ四方の四国ドライブ国道の小さな地図一枚もっただけなのだ。そして、家内が朝三時すぎに起きて作ってくれたむすび五ケと梅干が雑のうの中にあるのみである。本堂の前に立ち、私も何も分からず両手を合わせ納札、そして札入より三枚の位牌を取り出し賽銭箱の上にまつり、心経を唱え合掌したのだった。勿論納経軸や帖は私の心の中になかったのである。ただ一途に気持を打込めばそれでよいと思っての事だった。拝み終えて本堂と隔りのない処に古い家が三軒並んでいる。昔の遍路宿だったのであろう。もう九時を廻った時刻と思うが、そんな時計も持たず時間も気にしない頭の中であった。その古い家から出て来た方に、ここに焼山寺入口と案内標があるが、歩いて参られる方がありますかと問うと、そうですね、修行僧とか学生さんが時に入られる様ですね、と答えてくれた。一瞬私は、そうだ、私も歩いて見ようと決心した。実はバスで次を尋ねながら利用して歩く心算で出て来たのであった。みなが歩くのなら私も歩こうと心は決った。そして山路にのめり込んだのであった。しばらく登ると大師修業の岩がどっかと待っていた。両手を合わせ南無大師遍照金剛を唱えながら、行先真暗な旅である事を一心に念じ山を登った。すると点々と岡山の大師講のつるした道しるべが木の枝につるされてあった。思い出せば、「ご苦労さん」「これより水がないので注意」「最後まで頑張ろう」等々、励ましやら注意の道しるべに出会い、称号をたえまなく口ずさみながら登るのであった。幾刻登っただろうか、まだ／＼登りの草ぼう／＼のほんの歩ける登り道である。陽は真夏の光を容赦なく投げかけてくる。一時間は過ぎただろうかと思いながら、水筒も時計も地図も計画もない無知識無鉄砲な私をこれ大変なことになった。この夏の真中にこんな思いつきでこんなになってしまった。しかしこれを犯したのは誰でもなく私自身である。こんなことを考えながらも杖の歩と共に称号を口ずさみつつ登るのであった。途端に真黒な五十センチ位の蛇が杖の前を横切った。はてな、あらっと思いつつ、数歩登ると山道沿いに一寸堀った処に水がたまっており、よれ／＼の柄が石の上にのっていた。のどは随分渇いている。水はさあバケツ一杯位だろうか、だがその時、志願兵で陸軍に入隊していた時の教えを思いおこした。水を呑むと長続きがしない。だからなるべく呑まない様に常に気を付けなければ、いざと言う時に間に合わないと、それをふと思いおこして、一日歩けば十二番に着くのはおぼろ気ながら分かっていても、まだ午前中である。右も左も山中で人家を見おろす事も出来ない状態におちいっているのである。ちょっと口をすすぎ盃に一杯位だったろうか、喉を通して又杖に頼り称号の連続である。それからしばらく行くと山道が少し緩かになり山の上であろうか、急坂はなくなって来た。そして一寸した平地が見えてきた。平地の人口にふと一間四方位の小さなお堂があった。縁起の標札を見ると大師がここを通られた時、中風の人を加持され、これにちなんで長戸庵との事、隣には昔お守りをしていた人があったのであろう。住家の柱が折れ屋根が地上にのしかかっている。私は感無量になり札入より位牌を三枚格子戸の桟にまつり、大きな声で均さんよ、久さんよ、一二三さんよ、父さんと四人で阿波の山を登ってきたよ。今ここは長戸庵という処らしい。苦しかっただろう。のども渇いただろう。誰一人居ない山中の出来事である。私は涙が溢れた。出よ出よいくら涙が出たっていい、苦しくとも親子四人が大師の歩いた道をふみしめ／＼歩いているのだから。涙ながら我が子大師を慕い線香の一本も供えたく、マッチをまさぐっても自らの肌にはついていない。せっかくだが線香もだめだと思うと、ふと見るとマッチの箱がある。これは／＼と思いながら開けてみんとマッチは一本もない。もうだめだと思いながらお堂の縁を見ると、一枚板をついであるその板の隙間に一本マッチの軸があった。枯木の枝でほじくり出し一度擦るが消える。もう一度擦るがまた消える。仕方がない。もう一度擦った。不思議だ。軸に火がともった。涙がどんどん流れる。又子供の名前を口ずさみ一緒にお線香をまつろうよ、まつらしてくれたんだよと……。位牌を札入にもどしてさあと立上がった途端に向こうから古ぼけた衣服にリュックサックを背向った老人が現れ、お遍路さん水をのみなされと、私はリュックサックを堂の縁に降した。私は驚いた。こんな山の中で人に会えるとはと……。私は嬉しさで一杯である。そして一斗缶の水を心ゆく迄口の中に滑し込んだのであった。そうして話をしているとその老人曰く。私は二・三年前四国遍路を志して東京よりやって来た。そして一番からここまで来たがどうした事か次へ行けないのだ。仕方なく山の下の空家に住み夏場は土木仕事に行き月一回づつ、山の麓からこの庵へ水や花を背負って参るのですと語られ、不思議なめぐりあいに身の引き締まる思いがしたのであった。そして遍路袋の中の家内の心ずくしのむすび五個と梅干を、陽を見ると少し早いようだが、一緒に食べませんかと申し出ると、老人は非常に喜んで二人で昼食のむすびに舌づつみを打ったのである。時真夏の真昼も近い頃だったが、この人に会えた事に感謝しつつ杖と称号の念誦の山中の歩みがはじまった。山中の木こり道である。でも目に映える生ける植物、草木、遠目には一山緑と見える山だが、数知れない植物が生きてそれぞれの使命を果たしているのだ。そして孤独に山中をさまよう私の様なつまらぬ人間にでも微笑み、励まし語って来てくれる大自然と孤独な一人の人間の出会を大師は如何に受け取られながら一千年余前に感じられたのだろうかと……。大師の心境を憶測すべくもないのに憶測しながら、木につるした道しるべに励まされ教えられながら歩くのだった。

総代会役員

（◎総代長　○副総代長　△霊場巡り部長）

庄田　○三浦藤作　○森下　繁
渡内　千種司郎
高助　岩田　真
△児玉正一　山本清四郎
大土井　松井泰吾　谷　亀
西部　藤本太郎
市場　◎島岡　篤
中東　坂口一海　松本調二郎
大東　松井金次郎　木下政男
敷井　小橋　一　川野忠義
尾張　藤本安治　種草立司
下寺　内田稲生　山本　栄
問口　武内勝友
前泊　山田実男
虫明　内田長次郎

密教婦人会役員

（◎会長　○副会長　△会計）

庄田　有本小夜子　松本富子
渡内　○浅尾美佐恵
大土井　児玉菊枝　橋本安子
西部　坂上　都　釜井多美子
市場　井前早子　谷　政子
中東　△藤岡花子　◎水野幸子
大東　心光速子　長寿初枝
敷井　川野光子　川野君子
下寺　○山本八重野　山本松香　久本千和
問口　武内笑子
泊　内田照子
前尾張　田渕里津子　八塚よね